

行政院國家科學委員會專題研究計畫 成果報告

單士釐與日本：以《受茲室詩稿》和《癸卯旅行記》為中心 研究成果報告(精簡版)

計畫類別：個別型
計畫編號：NSC 96-2411-H-040-002-
執行期間：96年08月01日至97年07月31日
執行單位：中山醫學大學應用外國語言學系

計畫主持人：蕭燕婉

計畫參與人員：此計畫無其他參與人員：無
此計畫無其他參與人員：

處理方式：本計畫可公開查詢

中華民國 97年10月24日

単士釐と日本 ― 『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』をめぐって

蕭 燕婉

はじめに

阿片戦争と二度の世界大戦に挟まれた激動の時代に、その生涯を送った、一人の女流詩人にして外交使節夫人がいた。単士釐（一八五八～一九四三）、字は蕊珠、号は受茲、浙江省蕭山の人である。彼女の著作には、『受茲室詩稿』（注1）、『癸卯旅行記』三卷（鍾叔河主編『走向世界叢書』岳麓書社出版 一九八五年）、『帰潜記』、『清閨秀正始再続集初編』之一、之四、『清閨秀芸文略』五巻がある。また、永江正直『女子教育論』一卷、下田歌子『家政学』の訳書がある（注2）。夫の錢恂（一八五三～一九二七）は、字は念劬、浙江省呉興の人で、魯迅と共に語絲社を結成した錢玄同の兄である。光緒二十四年（一八九八）、湖広総督張之洞が留日学生を派遣すると、錢恂はその監督を命じられ、同三十一年には更に考察政治参贊官となった。続いて、駐露西亜公使館の参贊に任じられた後、和蘭公使、伊太利公使を歴任した。

夫錢恂と共に単士釐が初めて日本を訪れたのは、日清戦争に敗れて四年後の一八九九年（光緒二十五年）のことであり、秋瑾が服部宇之吉夫人繁子の勧めで来日したのより五年早かった。一九〇三年、彼女は夫と共に日本を発ち、ロシアに赴いた。翌年に出版された『癸卯旅行記』は、中国人女性の手になる最初の日本、韓国、中国、ロシアの旅行記として名高い。また、本書は東アジア及びヨーロッパの歴訪という比較文化的な側面からも注目される。

本論文は、『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』における、単士釐の日本での見聞のみに焦点を絞り、彼女の目に映った二十世紀初頭の明治日本はどのような様相を呈していたか、日本を知ることを通じて自国文化へのいかなる省察を

迫られたか、日本人との交流の実態、また異文化に対してどのような文学的感受性をもって臨んだか、などの問題を明らかにしようとするものである。また、殆どが男性の手になる東遊日記の系譜の中で（注3）、単士釐の日本見聞記がどのような意義を有するのかも検討する。最後に、以上の検討を通して、伝統と近代のはざまに生きた単士釐が、中国女流文学史上いかなる位置を占めるのかについても考えていきたい。

一 異文化との出会いの契機

一八四二年、阿片戦争に敗れた中国は、強烈な屈辱と挫折感の中で、ようやく外国の情勢に目を向け始めた。同治五年（一八六六）、斌椿は同文館の学生を率いてヨーロッパへ渡航した。これは清国の役人が西洋諸国を巡歴した最初である。その著『乗槎筆記』は、清末の役人が書いた初めての西方見聞録となった。その後、駐英・駐仏の大臣郭嵩燾は、光緒元年（一八七五）に『使西紀程』を出版し、続いて光緒二年、商工業代表の李圭は、地球一周旅行の後、『環遊地球新録』を著した。これらの見聞記は、清国の役人や商工業界人士の目に映った欧米世界について記したものである。一方、阿片戦争以後、清国人の手になる最初の日本見聞記は、おそらく羅森（字は向喬、一八二一～一八九九）の『日本日記』であろう。羅森はペリー提督の第二回日本訪問の際、香港から遠征隊に参加した中国人で、その時の随行記である『日本日記』は、一八五四年に香港英華書院の新聞「遐邇貫珍」に掲載された（注4）。また、日清戦争で日本に敗れるという大きなショックを受けた後では、西洋をはるか遠方に見据えつつも、より近い明治日本を媒介として、中国に必要なものを緊急に摂取しようという動きが一举に強まった。その結果、外へと目を向けた真摯な中国知識人が、日本に赴いて実地視察を行うことも一層盛んになった。実藤恵秀氏が心血を注いで蒐集した光緒年間刊行の東遊日記は、二百二十七種以上にもものぼり、現在は東京都立図書館に保存されているという（注5）。これらの夥しい東遊日記の殆どは、日本の歳時風俗、官制、兵器、教育制度、学界、文士、書籍などの多方面に亘って具体的に述

べたものであり、当時の日本事情を把握するには非常によい指針となったと見られる。

このような帝制晩期から近代への過渡期にあたって、海を越えた中国女性による、最初の異文化接触を綴った見聞記が世に現れるには、日本で単士釐の『癸卯旅行記』が出版される一九〇四年を待たねばならなかった（注⁶）。しかし、単士釐より前に、彼女のように外交使節の家族として海外へ渡った女性がいなかったわけではない。例えば、初代駐英公使郭嵩燾は任地に妻を伴ったが、夫人は「閨を出でず」という古い伝統を守り、外国にいながら西洋人社会と積極的に関わろうとはしなかったようだ。また、曾紀澤の妹曾紀耀は兄と一緒にイギリス、フランスへ行った経験があり、光緒五〇七年のヨーロッパ滞在中に、中国にいる妹へ手紙を送っているが、残念ながらヨーロッパでの見聞には全く言及していない（注⁷）。光緒三十年（一九〇四）に刊行された曾樸の小説『孽海花』では、駐ドイツ使節夫人の保守的な考え方が次のように描かれている。夫人笑道：「…、聞得外国風俗、公使夫人一様要見客赴會、握手接吻。妾身出身名門、萬萬弄不慣這種腔調。」（夫人は笑って言った。「…：外国の風習では、公使夫人もお客に会い、宴会に赴き、お客と握手やキスなどをすると聞きました。私は名門の出ですから、絶対このような風習にはなじみません。」）

「公使夫人」の外国人と触れ合うことを拒否しようとする態度は、おそらく伝統的な規範を守ってきた当時の女性の考え方を反映するものであろう。したがって、単士釐をして中国以外の世界に接触するに至らしめたものは、単に外交使節夫人の身分だけではなかった。より大きな理由は、単士釐が戦争物語や旅行記を愛読し、並はずれた好奇心と勇気を持っていたことに求められよう。彼女は、『癸卯旅行記』巻下で「予幼時喜讀二百數十年前塞北戰爭諸記載、其誇耀武功、雖未足信、然猶想見色楞格河上鐵騎胡笳之聲…」（予、幼時より喜んで二百數十年前の塞北戦争の諸の記載を読む、其の武功を誇耀せるは、未だ信ずるに足らずと雖も、然れども猶お色楞格河上の鉄騎胡笳の声を想見す…）と、戦記に描かれたまだ見ぬ地域の風景に思いを馳せ、未知の世界を体験したいという意欲を吐露している。

更に日本滞在中、単士釐は、日本語の勉強のために福島安正の『単騎遠征録』を翻訳している（注⁸）が、このこと

は彼女の旅への憧憬と冒険心を、より一層掻き立てることになったようだ。明治二十五年二月、ドイツ公使館付武官の福島は帰国の途に就くが、その際、軍事視察を目的とし、シベリア横断を計画した。彼はベルリンを出発し、ペテルブルグ、ウラルを経て、シベリアに入り、苦難の末、明治二十六年（一八九三）六月、ウラジオストクに到着する。一八九三年、大阪朝日新聞社の記者を勤めていた西村天囚は、福島中佐をウラジオストクに迎え、旅の話聞き、それを『大阪朝日新聞』に百二十回にわたって連載した。この記録は、翌年『単騎遠征録』として出版され、ユーラシア大陸横断の画期的な記録として当時のセンセーショナルな話題となった。福島安正の『単騎遠征録』（『世界ノンフィクション全集』三、筑摩書房 一九六〇）の冒頭部は次のように始まる。

明治二十五年二月十一日、：友あり、ベルリンの城外まで送って、：帽子をあげて別れを告げる。：翌十二日午前九時三十分出発、友と手を握って再会を約し……。時に細雨はさむざむと落ち、北風きびしく吹き渡る。

一方、単士釐は一九〇三年に日本からロシアに向かったのだが、出発当時の様子を次のように書き綴っている。

二月十七日（陽三月十五日）家人之外、同國人、日本人送行者數十。汽笛一聲、春雨溟濛、遂就長途。（二月十七日（陽三月十五日）家人の外、同國人、日本人の送行する者数十人。汽笛一声、春雨溟濛として、遂に長途に就く。）

（『癸卯旅行記』巻上）

興味深いことに、二つの旅行記の冒頭で描かれた、見送りの場面や小雨模様の天気は、非常に似通っている。旅の目的や方向は全く異なっていたにせよ、単士釐は福島安正の『単騎遠征録』を強く意識していた可能性が強い。

以下、『癸卯旅行記』に記された単士釐の旅の経路と日程を簡単に要約してみよう。巻上に記された旅は以下の通りである。一九〇三年三月十五日午前七時頃、汽車で東京を出発。午後九時半ごろ大阪に着き、第五回大阪内国勸業博覧会と、堺の水族館を見学。三月二十一日、大阪から神戸に出て西京丸に乗船し、二十三日に長崎に到着した。計らずも西京丸が座礁するというトラブルに見舞われたため、二十六日まで長崎に滞在してから薩摩丸に乗り換え、二

十八日によく上海呉淞口に着いた。それから暫く故郷に帰省していたが、四月十一日に上海で弘済丸に乗り、十三日に長崎に着いたが、ロシア往きの船を待ったため十九日まで再び長崎を観光した。十九日に長崎から伊勢丸に乗船し、二十日に韓国のプサンに着いた。二十八日にプサンを立ち、五月二日、無事ロシアのウラジオストクに着いた。

巻中は、五月二日にロシアのウラジオストクを出発し、中国のハルビンを経由して、五月十三日に満州里に到着するまでの行程を綴ったものである。巻下は、五月十三日に満州里を出発し、十五日にバイカル湖を観光、二十三日にはモスクワ、そして二十六日の午後サンクトペテルブルグに到着するまでの日々を紹介したものである。

二 単士釐の見た日本、その出会った日本の女子教育家

四十一歳になって初めて海を越えた単士釐は、自ら遭遇した明治日本の社会、風俗などについて、興味をそそる詩を沢山残している。『受茲室詩稿』巻上「偕夫子游箱根」（初見電車）その一では、彼女は次のように詠じている。

雲軒自昔語無稽 竟有機車路不迷 電製汽蒸安且速 毋勞挽鹿過前溪（雲軒 昔より 語 無稽なるも 竟に機

車の路に迷わざる有り 電製の汽蒸は 安らかにして且つ速かなり 鹿を挽くを勞する母くして 前溪を過ぐ）

「雲軒」とは天女の乗る牛車のことで、唐・顧況の「梁廣畫花歌」に「王母欲過劉徹家、飛瓊夜入雲軒車」（王母、劉徹の家を過ぎらんと欲し、飛瓊、夜に雲軒車に入る）を踏まえる表現である。初めて電車を見た単士釐は、電車が安全で且つ速いことに驚き、大いにその利便性を賞賛した。単士釐は近代化していく日本に注意を向けただけでなく、「日本竹枝詞」その五（『受茲室詩稿』巻上）においては、玄関、雨戸、御早（お早う）、垣根、朝顔といった日本製の語彙をふんだんにちりばめた口語に近い言葉を使い、日本の人情風俗や日本風の建築などをエキゾテックに描いている。

趁涼侵曉出玄関 雨戸初開烟靄間 涼を趁い 曉を侵して 玄関を出づ 雨戸 初めて開く 烟靄の間

鄰右相逢稱御早 垣根深處數朝顔 鄰右 相逢えば 御早と称し 垣根の深き処には 朝顔を数ふ

異国趣味を満喫していた単士釐は、「日本竹枝詞」その三において、子供の姿に焦点をあてて、日本の新春風景を、
乙女衣装粲粲新 共抛羽子約親隣 乙女の衣装 粲粲として新たななり 共に羽子を抛ちて 親隣と約す

無端桃頬呈雅點 廣袖頻遮半面春 端無くも 桃頬は雅点を呈し 広袖 頻りに遮る 半面の春

と詠じている。「粲粲」とは鮮やかで盛んなさまの意で、『詩経』「小雅・大東」に「西人之子、粲粲衣服」（西の方都の人は、麗しき衣よそおひぬ）とある。お正月になると鮮やかな衣装を着て羽子板で羽根をつけて遊ぶ女の子の様子や、頬を桃色に染めた日本女性の健康美は、単士釐に強い印象を与えたことであろう。初めて日本を訪れた中国人は、日本の正月の遊びや自由奔放な子供の姿に、共通して新鮮な感想を抱いたようである（注9）。彼女もまた汽車の中で、唱歌を歌う日本の児童の天真浪漫な姿を目にすると、おのずと中国の子供との対比に連想が向かったようで、受験勉強に没頭し活力を喪失した中国の子供の不運を嘆く「汽車中間児童唱歌」（『受茲室詩稿』巻上）という詩を詠じた。

天籟純然出自由 清音嘹唳發童謳 天籟は純然として自由に出づ 清音は嘹唳として 童謳 発す

中華孩稚生何厄 埋首雲窗學楚囚 中華の孩稚は 生まれて何の厄かある 首を雲窓に埋めて楚囚を学ぶ

明治日本の中で、近代文明と新文化の香り漂うさまざまな事象に接しつつ、欧米列強の半殖民地に陥らんとしている中国の子供の未来や、そのなす術もない現状を考えれば考えるほど、単士釐は焦燥を募らせるばかりであったろう。少年少女に期待し、強い関心を寄せる点では、魯迅のあの有名な「子供を救え」（『狂人日記』）という叫びとも共通するように思われる。この詩の内容からは、日本への憧憬と中国の現状に対する危機感とが縋い交ぜになった複雑な眼差しが感じられる。このような日本への複雑な眼差しは、「日本竹枝詞」その十二の床屋を題材とした詩からも窺える。

大書檐額喜田床 理髮師諳各國長 大書せる檐額には 喜田床とあり 理髮師は諳んず 各国の長

華式歐風皆上手 只嫌坊主喚羌羌 華式 欧風 皆上手なるも 只だ嫌う 坊主 羌羌と喚ぶを

各国の髪の手スタイルを熟知した床屋には入ってみたいのだが、ただ「ちゃんちゃん坊主」というのは、中国人を蔑

視し、その心を傷つける言葉なのである（注10）。しかし作者の視点は、あくまでも冷静で客観的であり、中国人として日本人から受けた侮蔑に対する感情の表出は、最小限に留められているように思われる。

ところで、日本にいる間に単士釐は大勢の日本人と出会っているが、最も注目に値する人物として、女子教育家の津田梅子と下田歌子の二人をあげることができよう。津田梅子は一八七一年、欧米視察の岩倉具視大使一行がアメリカへ旅立つ際に、募集した女子留学生のうちの最年少であった。帰国後、津田梅子は女子教育に尽力し、地域社会や国際社会に大きく貢献した。『受茲室詩稿』巻上「庚子秋、津田老若約夫子偕予同游金澤及横須賀」詩に「同行有女士、學校秉師鐸（津田梅子）、東語雜華語、居然通酬酢」（同行に女士有り、学校にて師鐸を乗る（津田梅子）、東語に華語を雜え、居然 酬酢を通ず）とある。これによれば、一九〇〇年に単士釐は津田梅子と出会い、日本語と中国語を混じえながら意見を交わしたことが分かる。津田梅子が、先駆的な私立女子高等教育機関の一つである「女子英学塾」を設立したのも、一九〇〇年のことである。

また、『受茲室詩稿』巻上「丙午秋留別日本下田歌子」詩に「六載交情幾溯洄、一家幸福荷栽培（長子婦包豊卒業於実践女学校）」（六載 交情 幾たびか溯洄す、一家幸福にして栽培を荷う（長子の婦包豊は実践女学校を卒業す）とある。下田歌子は明治・大正を代表する女子教育家である。単士釐の長男の嫁銭包豊は、下田歌子が創立した実践女学校の留学生であった（注11）。この詩の内容から、単士釐は下田歌子と六年間の親交があり、中国の女子留学生を受け入れた下田歌子に並々ならぬ感謝の気持ちを持っていたことが分かる。日本で女子教育に熱い思いを傾けた津田梅子と下田歌子に大きな影響を受けたのか、中国近代化の荒波に、単士釐も彼女なりに身をもって立ち向かおうとし、中国における女子教育の啓蒙宣伝にかなり力を注いだようだ。

三 日本で中国をどう見たか

他者のイメージは自分を映す鏡でもある。単士釐の日本イメージには、当然中国の姿も映し出されている。では、単士釐は日本で中国をどう見たのか。この問題を検討するために、まず日本の国民文化との比較が随所に見られる『癸卯旅行記』を取り上げよう。例えば、一九〇三年、大阪内国勸業博覧会の教育館を見学した後、日本の成功は、教育の普及、近代学校制度の整備がその根本的な力となつてゐるとの認識を、次のように示している。

十八日（陽三月十六日）：日本之所以立于今日世界、由免亡而躋于列強者、惟有教育故。即所以能設立此第五回之博覧會、亦以有教育故。…要之教育之意、乃是為本國培育國民、并非為政府儲備人材、故男女并重。且孩童無不先本母教、故論教育根本、女尤倍重于男。…中國前途、晨雞未唱、觀彼教育館、不勝感慨。（十八日（陽三月十六日）：日本の、今日の世界に立ち、由りて亡を免れて列強に躋る所以の者は、惟だ教育有るが故なり。即ち能く此の第五回の博覧會を設立する所以も、亦た教育有るを以ての故なり。…之を要するに教育の意は、乃ち是れ本國の為に國民を培育するにして、并して政府の為に人材を儲備するに非ず、故に男女并に重し。且つ孩童は先ず母の教に本づかざるは無し、故に教育の根本を論ずれば、女は尤も男に倍重す。…中國の前途は、晨雞未だ唱えず、彼の教育館を觀て、感慨に勝えず。）

中国の前途に対して強い関心を持つていた彼女は、女性としての立場から、男女は平等に教育を受けなければならぬと積極的に主張した。この意見が生まれた背景として、一八八七（明治二十）年、時の文部卿森有礼は「国家富強の根本は教育に在り、教育の根本は女子教育に在り」（「一中国地方学事巡視に際しての説示」）として、女子教育を重視する必要を説いている。また、女子教育を母親教育につなげることで、女子教育の発展を国家の富強と結びつけようとする単士釐の主張は（注12）、維新派の梁啓超が提唱した「強国強種」（注13）の理論に沿うところが多いと見られる。その意見は、現在の視点から見ると、附属的女子教育理論にすぎないものかもしれないが、当時においては、文明開化の日本の女性政策をしっかりと受けとめた先進的な主張だったと言えることができる（注14）。ところで、勉学の機会

を奪われてきた中国の女子教育を強く批判する反面で、彼女は中国の伝統的な婦徳を大いに評価している。大阪で大雨を冒して博覧会を参観した時に、息子の嫁に諭した言葉を、『癸卯旅行記』巻上で、次のように記している。

二十二日（陽三月二十日）大雨竟日、予等冒雨遊博覧會。……中國婦女本罕出門、更無論冒大雨步行于稠人廣衆之場。予因告子婦曰：今日之行爲拓開知識起見。雖躑躅雨中、不爲越禮、況爾侍舅姑而行乎？但歸東京後、當恪守校規、……予謂論婦徳究以中國爲勝、所恨無學耳。東國人能守婦徳、又益以學、是以可貴。（二十二日（陽三月二十日）大雨、日を竟^おう、予等、雨を冒して博覧會に遊ぶ。……中國の婦女は本より門を出づること罕なり、更に大雨を冒して稠人広衆の場に步行するは論無し。予因りて子婦に告げて曰く：今日の行は知識を拓開して見を起こすが為なり。雨中に躑躅すと雖も、礼を越ゆと為さず、況んや爾は舅姑に侍して行くをや。但だ東京に帰りて後は、当に校規を恪守すべし、……予謂えらく、婦徳を論ずれば究^つに中国を以て勝れりと為す、恨む所は学無きのみ。東国の人は能く婦徳を守り、又益すに学を以てす、是を以て貴ぶべしと。）

注目すべきは、伝統的な道徳と新しい学問の融合を求めるといふ彼女が高く評価していた教育理念は、一八九九年に東京で開校された実践女学校の校則の精神を反映するものであったということだ。創立当時の「私立実践女学校規則」第一章第一条は、次の通りである。「本校は本邦固有の女徳を啓発し、日進の学理を応用し、勉めて現今の社会に適應すべき実学を教授し、賢母良妻を養成する所とす」（注15）。彼女がこのようにしなれば日本の女子教育のあり方に共感する見解を示したのは、おそらく日本滞在中に、近代日本の女子教育に尽力した津田梅子に出会い、また教育界で大いに活躍した下田歌子と親交を深め、彼女らの教育方針を理想的なものとして認めたからであろう。

また『癸卯旅行記』巻中では、具体的な例を取り上げて、日中両国の軍備に対する重視の程度や教育観念を対照的に比較しつつ、中国を憂うる陰鬱たる思いを綴っている。

去歲日本横須賀造成一軍艦、舉進水式、仿西例延男女賓。予婦以女學生故、蒙女校長挈之往、列女賓之末座、亦

得予聞其造法用法。而予屢經吳淞口、外子每指所謂「海容」、「海圻」者曰：此中国新軍艦也。無論我婦女輩不獲登、即外子亦未嘗登覽。以視異國之每艦炮數、炮力、速率、船質、必一一詳播、惟恐人不知者、相去何如耶！

去歲、日本の横須賀に一軍艦を造成し、進水式を挙げ、西例に仿いて男女の賓を延ぶ。予の婦、女学生なるを以ての故に、女校長の之を挈ひきて往くを蒙り、女賓の末座に列し、亦た予も其の造法・用法を聞くを得たり。而して予、屢しば吳淞口を経るに、外子、毎に所謂「海容」、「海圻」なる者を指さして曰く：此れ中国の新軍艦なりと。我が婦女輩の登るを獲ざるは論無く、即ち外子も亦た未だ嘗て登覽せず。以て異國の每艦の炮数、炮力、速率、船質、必ず一一詳播にし、惟だ人の知らざるを恐るる者に視くぶれば、相去ること何如ぞや！

横須賀で西洋の制度に倣った軍艦の進水式が行われたことをきっかけにして、あまりにも軍備に無感心で、知識欲に欠けた中国のイメージが、彼女の目に映し出されたのである。日本で連続的に受けた強烈なカルチャーショックは、単士釐に伝統的な女性観の改造を促したようであった。日本の後を追うために中国の女性に必要とされているのは知識だけではない、閉鎖的な社会から勇敢に一步を踏み出して、世界に飛び込んでゆくことが要求されている、と単士釐は考えるようになった。そのため、彼女は上海から故郷@石に帰省した時、『癸卯旅行記』巻上の中で、日本で自分がいかに開放的な気分浸れたかを吐露し、狭苦しい閩中から歩み出よと中国の女性を励ましている。

中国婦女向以歩行為艱、予幸不病此。當在東京、歩行是常事。辛丑寓居鎌倉、游建長寺則攀樹陟巔、賞金澤牡丹則繞行湖壩、恒二三十里。然在中國、則勢有所不能。此@石為幼年成長之地、……故特以歩行風同里婦女。(中国の婦女は向さきに歩行を以て艱しと為すも、予は幸いに此を病まず。東京に在るに当りては、歩行は是れ常事なり。辛丑、鎌倉に寓居し、建長寺に游べば則ち樹に攀じ巔に陟り、金澤の牡丹を賞べれば則ち湖壩を繞行すること、恒に二三十里なり。然れども中国に在れば、則ち勢い能くせざる所有り。此の@石は幼年成長の地たり、……故に特に歩行を以て同里の婦女に風す。)

また、中国女性の纏足は、中国の本質的な病根の一つであり、絶対に禁止すべきだということを、彼女は『癸卯旅行記』巻上において、「十三日（陽四月十日）……席間談衛生事、因諄戒纏足、群以為然」「十三日（陽四月十日）……席間、衛生の事を談じ、因りて諄ろに纏足を戒め、群は以て然りと為す」と語っている。

しかし、外界との隔絶を徹底的に拒む姿勢を示した単士釐は、自身は纏足をしていたにもかかわらず、未曾有の海外旅行を行って、大きな成果をあげた。したがって、日本への旅立ちを契機として、単なる身体的な束縛というより、むしろ封建制度下の清国という社会環境に加えて、女性の本来持っているエネルギーを抑圧されていることのゆえに、中国の女性は不自由な生き方を余儀なくされているのだ、という認識を彼女は抱くに至ったのである。

四 単士釐が目指したもの

鋭い観察眼と鮮やかな描写力は、彼女の日本見聞記を読むと誰しも痛感する所であるが、その背後には、旅した地域の特徴や外から見た祖国像を自国民に伝えたいという彼女の思いがあったに違いない。かつて単士釐は夫と共に金沢や横須賀を見学した後、「寄語深閨侶、療俗急需薬。劬學當斯紀（英人論十九世紀為婦女世界、今已二十世紀、吾華婦女不可不勉旃）、良時再來莫」「語を深閨の侶に寄す、俗を療すに急に薬を需む。劬学 当に斯の紀なるべし（英人は十九世紀を論じて婦女の世界と為す、今は已に二十世紀なり、吾が華の婦女はこれを勉めざるべからず）、良時は再び來ること莫し」（注16）と叫んで、新しい二十世紀を迎えるには随分と遅れた現状にある中国の女性に対して、警鐘を鳴らさずにはおれなかった。とりわけ女性に関心を寄せた単士釐は、自分の生き方やアイデンティティーをめぐって次の如く記す。

回憶歲在己亥（光緒二十五年）、外子駐日本、予率兩子繼往、是為予出疆之始。嗣是庚子、辛丑、壬寅間、無歲不行、或一航、或再航、往復既頻、寄居又久、視東國如鄉井。今癸卯、外子將蹈西伯利之長鐵道而為歐俄之遊、予喜相偕。十餘年來、予日有所記、未嘗間斷、顧瑣細無存者。惟此一段旅行日記、歷日八十、行路逾二十萬、履

國凡四、頗可以廣聞見、録付并木、名曰『癸卯旅行記』。我同胞婦女、或亦覽此而起遠征之羨乎？跂予望之。

回憶するに、歳、己亥（一八九九）に在り、外子（夫君）、日本に駐まり、予、両子を率いて継ぎ往く、是れを予が出疆の始めと為す。是に嗣いで庚子、辛丑、壬寅の間、歳として行かざる無く、或いは一航し、或いは再航して、往復既に頻りにして、寄居することも又久しく、東国を視ること郷井の如し。今、癸卯、外子、將に西伯利^{シベリア}の長鉄道を蹈みて欧俄の遊を為さんとし、予も喜んで相偕にす。十余年來、予、日に記する所有りて、未だ嘗て間断あらざるも、顧みるに瑣細にして存する者無し。惟だ此の一段の旅行日記は、日を歷ること八十、行路は二十万を逾え、国を履むこと凡そ四、頗る以て聞見を広むべく、録して并木に付して、名づけて『癸卯旅行記』と曰う。

我が同胞婦女、或いは亦た此れを覽て遠征の羨を起さんか？跂^{つまた}ちて予、之を望む。（『癸卯旅行記』自序）

序文の最後の部分に注目すれば、単士釐は、旅日記の出版を通して、時勢に無関心な中国女性の自覚を促し、民智未開の中国人の冒険心を喚起しようとしていたことが窺える。また、「或亦覽此而起遠征之羨乎」という言葉からは、中国における『癸卯旅行記』の刊行が、『単騎遠征録』の女性版とも言えるような、大きな影響力を持つてほしいという彼女の意気込みが読み取れるであろう。いずれにせよ、彼女の異国見聞は、多くの女性に外を眺める視野を開かせただけでなく、当時、新しい文明を摂取することのためらい、或いはそれを排斥していた人たちにさえ、近代的国家の具象的なイメージを巧みに提供しえたことであろう。

おわりに

以上、帝制晩期から近代への過渡期を生きた単士釐の、主として日本に関わる文学活動を眺めてきた。日本における彼女の文学活動は、常に夫と行動を共にする外交使節夫人という立場からなされたものではある。それにしても、中国にいるのとは違って、閉じられた「内」の世界にも、新しい快適な生活スタイルや、西洋式の時間システム^(注17)、

更には物見遊山に至るまで、変化の兆しは着実に単士釐の生活に侵入しつつあった。さらに夫婦関係にも大きな変化が起こり、妻は「外」の世界や出来事について、意見の交換ができるようになり、また、夫をサポートする役割をも得た(注18)。海外での外交使節夫人の活躍は、私的領域を本来の活躍の場と定められていた女性が、その活躍の場や文学創作の題材を、公的領域にまで広げたことを象徴的に示すものであった。日清戦争に敗れた中国は、日本を媒介として西洋の制度を学ぼうとしていたが、この風潮の中で、中国知識人による東遊日記が夥しく産み出されていった。東遊日記と呼ばれるジャンルの中で、唯一女性の手になるものが、『癸卯旅行記』である。単士釐は女性旅行者としての立場から、日本の諸相を生活の実感を通して文学的情熱を注いで描いたため、それはおのずと、国家組織に繋がりを持つ立場から男性文人が著した日本考察記の晦渋な内容とは一線を画するものとなっている。彼女の日本見聞記録は読者に異国情緒を楽しませる一方で、清国に新思潮を紹介する役割をも巧みに果たしたのである。

清末には、王朝体制の動揺に伴って、伝統的な女性観は強い打撃を受けつつあった。単士釐の女子教育の重要性と纏足廃止の主張は、維新派文人の康有為、梁啓超、譚嗣同らの意見と共通するものである。また、単士釐は新知識と共に、伝統的な道德の重要さも強調していたが、これは新旧の思想が入り混じった清末小説にも見られる特徴である。たとえば、『二十年目睹之怪現狀』(一九〇三)の「姐姐」や『新石頭記』(一九〇五)の「東方美」は、いずれも呉趼人によって作り上げられた、家の枠をこえ視野を広げようとする意識を持ちつつも、伝統的な礼儀を守るという一種の理想的女性像である。「内助の功」という役割を徹底的に果たした単士釐は、ジェンダー・イデオロギーの対極に位置する「ニュー・ウーマン」と呼べるような女性ではなかった。一九〇三年、金天翮は中国女性のために自由の鐘、革命の鐘を打ち鳴らそうとして『女界鐘』を著した。一九〇四年、『癸卯旅行記』が完成した後、革命運動や男女平等を主張する秋瑾の『精衛石』が『中国女報』に掲載された(一九〇八年)。単士釐の人生そのものと同じく、彼女の日本体験に基づいた著作は、中国における伝統と近代の狭間に生じた葛藤を具現したものであった。このことから、彼

女の作品には、時代精神の表現としての意義が認められる。のみならず、中国女性の手になる日本社会を観察した最初の文学作品としても、単士釐の著作は、中国女流文学史のなかで対応の位置を与えられて然るべきであろう。

注：

(1) 本稿で使用した単士釐『受茲室詩稿』は、一九八六年に湖南文芸出版社から刊行された陳鴻祥校点本である。底本は一九四二年に単士釐が羅守撰（羅振玉の姪）に贈った抄本である。なお、黄湘金「簡論単士釐詩集版本—附『受茲室詩稿』校記」（『圖書館雜誌』二〇〇六年第二期）には、上海復旦大学図書館に『受茲室詩稿』の稿本が収蔵されており、陳鴻祥校点本より優れているという指摘が見える。

(2) 永江正直著、単士釐訳『女子教育論』（清光緒二十七年至三十年、教育世界社排印本）は一橋大学に所蔵されている。『受茲室詩稿』巻中「丙午秋留別日本下田歌子」詩の「傳播微音愧譯才」という句には、「會譯君所著『家政学』付刊」と注されている。

(3) 東遊日記という語に関して、佐藤三郎氏は、「その書名を単にこの四字を記しているもののほかに、それに著者の名前を冠せたもの、旅行年を冠せたもの、視察対象を記したものがあがるが、書名中に「東遊」または「東游」の二字を入れているものが比較的に多いので、こうした日記類の研究に先鞭をつけられた故実藤惠秀先生は、これらの総称として「東遊日記」という語を用いられ、それが一般化しているようである」と述べている。（佐藤三郎『中国人の見た明治日本—東遊日記の研究』東方書店 二〇〇三年）。

(4) 鍾叔河『走向世界：近代中國知識分子考察西方的歷史』（北京中華書局 二〇〇〇年）の第八章「羅森見日本開国」を参照。

(5) 呂順長編著、王寶平主編『晚清中国人日本考察記集成：教育考察記』（杭州大学出版社一九九九年）の「総序（王寶平）」による。

(6) 胡文楷『歷代婦女著作考』（上海古籍出版社 一九八五年）の「附編、現代」に、『癸卯旅行記』三卷、一九〇四年日本同文印刷舎排印本」とある。

(7) 梁乙真編『清代婦女文學史』（台湾中華書局 一九七九年）の「第四編第一章第二節」に、「湘鄉曾文正公之女紀耀、光緒間隨

其兄劼剛侍郎、出使英法、歿於西洋旅次、有紫琅玕院遺稿二十篇」とある。また、『湘郷曾氏文獻』第十冊（学生書局 一九六五年）に、曾紀耀から妹宛ての手紙が収められているが、その中ではイギリスやフランスでの見聞には殆ど触れられていない。

(8) 『癸卯旅行記』巻下に「予昔年初習日本文時、曾試筆譯福島安正君（今少將）『単騎遠征録』」と。

(9) 黄遵憲『日本雜事詩』（実藤恵秀、豊田穰譯、平凡社一九六八年）「正月の遊び」、「幼稚園」の内容を参照。

(10) 明治二十九年（一八九六）に中国政府から最初の官費留日学生十三人が日本に派遣されたが、うち四人はまもなく帰国してしまつた。その第一の原因は「日本の子供からチャンチャン坊主チャンチャン坊主といつてひやかされたため、第二には、……」と、実藤恵秀は指摘している（『中国人日本留学史』くろしお出版 一九七〇年増補版、三十八頁）。

(11) 『中国人女性の日本留学史研究』第一章に「一九〇〇年に銭豊保（豊子、豊侏）が来日し、一九〇一年秋、下田歌子設立の実践女学校に入学した」とある（周一川著、国書刊行会 二〇〇〇年）。

(12) 『受茲室詩稿』巻上「辛丑春日偕夫子陪夏君地山伉儷游江島再步前韻」詩に「欲培佳種先諸母」とある。

(13) 梁啓超「論女學」（『飲氷室文集』 台湾中華書局 一九七〇年）を参照。

(14) その後、一九〇七年に中国は「女子師範學堂章程」を發布したが、その中でやはり「故凡學堂教育、必有以最完善之家庭教育、……而欲家庭教育之良善、端賴賢母……」と言っている。

(15) 『実践女子学園八十年史』（実践女子学園八十年史編纂委員会 実践女子学園出版 一九八一年）を参照。

(16) 『受茲室詩稿』巻上「庚子秋、津田老者約夫子偕予同遊金澤及横須賀」詩。

(17) 『癸卯旅行記』において、単士釐は中国式日付けと西洋式時間が入り混じったスタイルをとっているが、彼女は日本の標準化された時間システムに魅了され「自履日本、於家中會計用陽曆、便得無窮便利」（『癸卯旅行記』巻中）と言っている。

(18) 単士釐はかつて夫のために日本語の通訳を務めている。『癸卯旅行記』巻中に「日本之代理貿易事務官鈴木陽之助君及外務書記生佐佐木静君來訪、予亦出見、為外子傳譯」とある。